

<a href="#">泳ぐ焼き魚</a>	<a href="#">死因は二次放射能障害</a>	<a href="#">白魚</a>	原爆忌を迎えて	<a href="#">濡れた千羽鶴</a>	<a href="#">ヒロシマの遺臭</a>	<a href="#">朝日新聞記事</a>
-----------------------	----------------------------	--------------------	---------	------------------------	-------------------------	------------------------

## 原爆忌を迎えて - デッサンのない原爆被災者の絵 -

(Radioisotope)

News, 1984年8月号)

また八月が近づいてくる。テレビ、ラジオ、新聞などで、原爆にちなんださまざまな行事や企画が扱われる季節である。私はそれらの報道に関して、あまり熱心な読者ではないし、ときとして眼を通し耳を傾けても、一種の違和感や焦燥感の残ることが少なくなかった。

たとえば、原爆の余燼の残る広島焼野原を、母を探して歩き回り、茫然と眺めたあの数日間の情景と、記事の記述が似ているにもかかわらず一致しないのである。これは読める程度に投影されたスライド画像のピントが少しずれていて、一致しそうで一致しないときのもどかしさと共通している。

このもどかしさは、原爆の惨状を描いた内外の有名画家の力作を、広島市の原爆資料館でむかし見た際にも覚えた。そして私は、私の中に残る原爆被災の光景は、記録としての再現がおよそ出来っこないものとあきらめていた。

ところが、数年前にふたたび原爆資料館を訪れたときに、はじめて私の中にある映像と、はっきりピントの重なり合う絵の一群を見ることが出来た。

それは、被災者が自ら描いたシロウトの原爆のスケッチであった。私も趣味で下手な絵を描くが、それら被災者の絵には正直いって技法などないに等しい。それなのに、隣接して飾られている専門の画家の大キャンバスの絵よりも、真実が、小さな何枚もの画用紙の絵それぞれに生きているのである。

私は二度も三度も、それらの絵の並ぶ小さいコーナーをくり返し眺めて歩き、佇んだ。これらの絵のもつ真実の根拠はなんであり、また隣のコーナーの玄人の力作が、その努力にもかかわらず内包している空虚なもどかしさの原因はなにに基づくのであろうかと考えながら時を過ごした。

ご存知の方も多いと思うが、絵を学ぶにあたっては素描 — デッサンに相当の重点がおかれる。とくに人体画については、解剖学的な知識までとりいれて、健全な身体各部の写実の技術が訓練される。したがって、専門の画家の描く人体では、たとえそこに大胆な省略や誇張があったとしても、曲げられるはずのない方向に曲がった関節の手足はなく、解剖学的に非常識な筋肉のつき方や、アンバランスな構成の人体は描かれない。実際に、原爆資料館の玄人の絵の被災者は、なお“人間らしい”人間が傷つき、苦悩している図なのである。

一方、シロウトの原爆図の被災者には、そのようなバランスのとれた“人間らしい”人体はない。思い返せば、焼け崩れた市内を歩きつづけたとき眺めた、廃材のごとく積まれて硬直した死体（中にはまだケイレンしているものもあった）、壊れた橋げたにむらかった無数の白く水にふやけた死体、火傷のうみに湧いた蛆をのぞく力もなく呻いていた重傷者などなど、もはや人体画のデッサンで教わる“人間”の身体ではなかった。原爆は、死者も負傷者も、死せる“人間”や、傷ついた“人間”でさえもなくしていたのである。

さらに印象的であったのは、被災者の描いた絵の中の被災者は、画家の描いた被災者のような怨念がほとんど感じられないことであった。痛々しく傷つきながら、被災者はいずれも嘆くだけなのである。原子爆弾であることを知らなかったから、恨みに思わなかったのでもあるまい。このような苦痛を与えるものは、原爆であれ何であれ、恨み呪っても当然のはずである。

呪いの形相すさまじい、といった被災者の姿は、私が収容所や道ばたで呻いていた被災者には見出せなかったが、被災者の絵はこの点でも忠実であった。健康な状況であれば、呪いもし恨みもするはずの人間の心さえ、被災者に失わしめていたのである。健全な人間の心の素描をすれば、呪いの絵になるであろうところを、被災者は被災者の神仏に近い心まで描き切っていて、真の悼みがあらわれていた。

長い間わだかまっていた違和感が氷解して、広島をあとにしなから、呪うという人間的な感情も昇華し、人体の外形も物体に変化させられて、犠牲となった多くの人たちが哀れで悲しかった。それは、ありきたりの先入観で原爆を描き、その悲惨さを論ずるのは、犠牲者への冒瀆とさえ思えた。真実を求めて語ろうとする科学者には、なおのこと深い洞察力をもって原爆忌を迎えるべき季節がまためぐってくる。

\* \* \* \* \*

(後記) 県立広島二中の第19回卒業生の作成した「われらの記録」にも、級友の原爆の記憶がいくつか語られているが、その語り口はいずれも重い。それぞれの記憶にくらべて、語り、描くべきものが、とても語り、描ききれないからであろうか。



原爆資料館：被災者の描いた絵がある。

館の前には、子どもを抱えてうつ伏せの母親の像（作者：本郷 新）があるが、この像のままの姿の死体が当時はいくつも見られた。噴水は、水を求めた火傷の人たちへの鎮魂の思いからであろうか...

<a href="#">泳ぐ焼き魚</a>	<a href="#">死因は二次放射能障害</a>	<a href="#">白魚</a>	原爆忌を迎えて	<a href="#">濡れた千羽鶴</a>	<a href="#">ヒロシマの遺臭</a>	<a href="#">朝日新聞記事</a>
-----------------------	----------------------------	--------------------	---------	------------------------	-------------------------	------------------------